1952　昭和２７年９月１日発行　　鶴研
雑誌　近代映画　９月号　４頁

僕の青春手帳　鶴田浩二

僕にお喋べりしろというんですね。青春手帖ですって？
まあ、思い出すまゝに、お話してみましよう。

独立のこと

鶴田浩二が松竹から退社した。松竹と喧嘩して、手を切った。もう松竹映画には出ないだろう等々僕のこんどの独立については、いろんなデマが飛んだらしいな。これは、とんでもない解釈ちがいで、僕も些か迷惑というものだよ。僕は、松竹と喧嘩したのでもなんでもない。たゞ、この辺で一本立ちになって、企画から製作から、巡業に至るまで、いろいろと役者として経験してみたかったまでのことなんだ。松竹さんには、大変にお世話さまになったし、今後も沢山お世話になることだろう。松竹を離れたといっても、年四本出演の契約を結んであるし、松竹映画は好きだ。

僕は、こんどの行動について、こう考えたんだ。役者は、専属もよいが、多少、自分の好きなことが出来るような立場を持たなければいけない。なにからなにまで、縛られていたんでは、自分があれを演りたい、これもいゝというような作品も選べない。これでは、なんだか自分が悲しい。役者であって、丸で道具だ。全部が全部でなくても、せめて一本か二本位い、自分の全くの意志から出たものを演りたい。併せて僕はまだ若い。青二才だ。やっと今月を迎えて二十七年と八ケ月という幼さだ。もっと苦労しなくっちゃ。温室ばかりに居ては、人間がフヤけちゃう、そんな気にかられて、それで独立してみたんだよ。

だから、さあ（ママ）独立した。そしてついこの間、東北から北海道に巡業もやった。そして、色んな苦い味をなめたね。ホントに、人間一匹、生きるということが、とてつもなく難しいものだということが分ったね。しかし、僕は尼古垂れなどしないよ。なんでも、人間、経験だと思うしね、好きな貴方となら、苦労も厭やせぬ――という言葉ぢゃないが、好きなこの道、役者一本に徹底してみせるよ。それが僕の信念だ。

その代り、役者としていゝ役者になりたいな。芸一本に生きて、二十数年という長い年月、スクリーンで活躍している長谷川一夫さんは偉いものだなあ。僕みたいな馳け出しが、こんな云いかたして偉そうだが、まあ、勘弁して頂きたいな。僕は、長谷川一夫さんを尊敬しているんだよ。人間、何事もひとつことに徹して生きてゆくということは大したものだと思うな。まして、栄枯盛衰の激しい芸の世界だ。魅力を損わず、芸も失わず、天下の長谷川一夫という人気を保持しているのは、大変なことだ。僕は、自分が役者だから、余計ホントにそう思うね。僕の役者としての信念はそうした長谷川一夫さんを見習うことだと思っている位ですよ[1]。だから、長谷川一夫さんの瓜の垢を煎じて飲みたい位の気待だなあ。

---

[1] S26 に発足した後援会の住所は、長谷川一夫と同じマルベル堂内。勿論お許しがあったのだろう。

それにもうひとつ、長谷川一夫さんの信念にも頭を下げちゃうな。ちっとも、もったいぶらないし、たゞ多くの人に愉しんで貰えるものを作る、自分の信条をそうキチンと割り切って、しかも、堂々と表明しているなんてちっとやそっとの人では出来ないことだよ。

長谷川一夫さんは、苦労して来ているんだ。僕も大いに苦労するよ。裸一貫になって、自分というものを鍛え直したい、これが動機で独立したんだ。だから、今後はＡ社とかＢ社とかにこだわらず、僕の経験のために色んなことをやろうと思っているよ。でなければ、独立した意味がないしね。

ファンと僕

独立といえば、僕の独立第一回は、地方巡業だ。東北から、北海道まで行ったよ。地方を廻ってみて、僕は、本当にいろいろと勉強したね。いちばん、僕が感じたことは、ファンのことだったな。僕の名は、鶴田浩二だ。と、いった所で、まだ映画に出て三年とちょっと位の馳け出し役者にすぎないね。そんな僕なのに、何処でも多勢の人が見に来て呉れるんだ。僕は、とっても有難かったな。僕の挨拶と下手な歌で、ファンは喜んでくれるんだ。つくづくファンというものは、役者にとって大切なものだと感じたし、またこうしたファンの方たちのために僕はうんと喜んで貰えるものを作らなければいけないと思ったな。あれは、或る土地の公演の時だったよ。

三日間、毎日のように、舞台の一番前に来ている娘さんがあるんだ。ふたり姉妹でね。さあ、年から云ったら十六、七才位だろうね。いわゆる、美人とは云えないが、とても可愛いらしい娘たちなんだよ。それが毎日来ている上に僕に大きな花輪をくれたんだ。僕は感激しちゃったね。だって、その娘たち、訊いてみたら両親が居ない孤児なんだよ。何をして暮しているか云わなかったが、地方といったって入場料は馬鹿にならないや。高いものね。その上に、花輪呉れたりして、一年分のお小遣いを使っちゃったんぢゃないかな。

ファンて、こうしたものなんだよ。僕はね、だから何処の舞台でも思いきり働いたよ。その代り、身体はクタクタに疲れちゃったね。でも、いゝんだ。役者が、ファンに報いるたったひとつの道は、思いきり演ることだものね。舞台で投げちゃいけないな。上手か下手かは別問題だよ。思いきり演ればそれでファンには充分誠意を投げ出したことなんだもの……。

その娘たち、僕が次の土地に移った時も、やって来ていたね。それで、僕がその町を発つ時に、始めて宿へ僕を訪ねて来たんだ。

「すみませんが、鶴田さんの髪の毛を頂けませんでしようか？」逢ってみると、いきなりこう云うんだ。僕は、いじらしくなっちゃってね、いろいろ訊くと、先刻云った通りの孤児でね。なにか、一抹の淋しさが漂っているんだよ。

「どうしたの？」と訊くと、

「私たち、人生に夢が持てないんです」って、云うんだね。

「駄目だよ、そんなことぢゃ、未だ若いんだもの、しっかりしなさいよ」僕は、思わず一生懸命に激励したね。

それで、髪の毛が欲しいというから、僕は髪を梳いたね。自然に脱けた毛ぢゃ悪いやね。

くしでうんと髪の毛を梳いて、ムリして脱いたのをあげちゃった。あんまり可愛くて、いぢらしいだろう。
「東京へ来ることがあったら、家へ寄んなさい。決して、人生に希望を失っちゃあ駄目よ」
　もう一度、僕は彼女たちを慰めたね。でもね、僕はこれはお世辞ぢゃないんだ。あの娘たち、僕は何だか好きでね、本当に面倒をみてやってもいいと思ってるんだ。こういう人たちがファンで喜んでくれてるんだ。だから僕は役者って、役者冥利ということを考えるね。ファンって、有難いやね。

僕の夢

　ファンといえば、今、僕は大船で小津安二郎先生の「お茶漬の味」に出ている。小津先生の写真にはいつか一度でいゝから、出させて頂きたいと思っていたので、張切って出演していますよ。僕は、木暮さん、佐分利さん御夫婦に対する若い世代という役、津島さんと仲良しという具合になっているんだけど、皆さん、演技のうまい方ばかりなんで、とても好い経験だと思っているな。
　独立してから、実にいろんな企画がやって来るし、また、僕の所でも自主的に立案しているけど、仲々いゝ本がないんでね。誰かどしどし「こんなものを、鶴田に演らせたらなあー」という本を持って来てくれるといゝんだけどね。「お茶漬の味」はいい本だなあ。やっぱり、小津先生と脚本の野田先生の御力だ。役者は、やっぱり良い脚本と演出がなくちゃあね。役者がのびるも、駄目になるも、先ずいい脚本、いい演出が必要なんだよ。
　え？　「お茶漬の味」が終ったらどうするかだって……？　さあ、いま、「坊ちゃん重役」という話があるんだがね、また、或る人は「泣虫記者」をスイ選してるしね、とにかく「お茶漬の味」で七月一杯は駄目なんだ。そうそう、ハワイに行かんか？　という話もあるんだよ。
　ハワイの国際興行からの話だけどね。これは、新東宝の企画なんだ。高峰秀子ちゃんと僕の共演で「ハワイの花」[2]という題の写真でね、ハワイ、ロケーションをやろうといっているがね。これは楽しいな。ハワイは、前々からいちど行きたいと思っていたしね、実現したいな。だけど、デコちゃんが難しいかも知れないな。相手役さえ決れば僕は行くつもりでいるよ。内地よ、グッド・バイさ。
　独立したら、が然、あれやこれやと考えることばかり多くてね。せいぜい、企画倒れにならないようにガンバリますよ。こんな若造をめぐって、あっち、こっちでやいやいといってくれるのね、僕は本当に勿体ない、身に余る光栄と思っているしね、こいつあやっぱり、裸一貫になって始めて身にしみるものぢゃないかな。広い世間にひとり放り出されてみれば、ものゝ見方も考え方も、おのづと違って来るんだよ。温室の中に居ては、人間が甘くなっちゃうね。
　また、独立の話になっちゃったが、今の僕は、独立してみての難しさと感想でいっぱいなんだし、まあ、勘弁して下さいな。だから「お茶漬の味」でも、僕は真剣ですよ。だい

---

[2]　これが「ハワイの夜」になった。浩ちゃんが映画化権を獲得する前は、主演が月丘夢路でS26.4月上旬に渡米決定と云う記事があった。

たい、この映画そのものが、今迄の僕の写真とは色が全然ちがうしね。それだけに「お茶清の味」は、演り甲斐がありますね。小津先生ってセットでやっぱりちょいと恐いね。なんだか、僕の全部を見られちゃうような気がしてね、こんなこと考えるの、いけないな。僕というのは、だいたいざっくばらんな気性だが、やっぱり、しばゐとなると内気なのかな……？　とにかく、しばゐって難しいもんだなあ。なにもかも、第一歩の僕だ、まあ、これから新規蒔直しのつもりでいるんだ。

お酒と人生

どう？　もう、この辺でいいだろう？

なに、駄目だって！　やだね、またお酒の話かい？　酒は、ちかごろ余りやらなくなったよ。ひと頃は、無茶苦茶でね、あんな飲みかたしたのも、今は、もう昔の話さね。弱くなっちゃったよ。ビール四、五本で、もう酔っちゃうね。

それに、今、ちょいと身体をいためているんだよ。変な故障でね、どうも心臓は強い筈なんだが、その心臓がいけないんだよ。難しい専門語は知らないが、心臓が普通の人より肥大してるんで、他の内臓が圧迫を受けるんだな毎日毎日注射をうってるよ。かなわないね。どうやら、これも独立に影響があるらしいな。巡業というやつは、重労働だということが分かったよ。ろくろく飯もゆっくり食う暇もない、ファンは待ってる、となれば、一徹、血の気の多い僕だものね、もう夢中になっちゃって、心臓のことなんか考えなかったな。それか祟ったんぢゃないかしら……。東京に戻ったトタンに注射攻めとは、われ乍らユーウツさ。だから、好きな酒もつゝしまなくちゃね。皆んなが、ヂャンヂャン眼の前で呑んでると辛らいね。

酒といへば、三船敏郎君は強いね、いつだったかな京都の街で三船君にぶつかったがすごく呑んでるんだな、彼氏。……こっちは素面だったし、挨拶しないで逃げちゃった。僕より、もしかすると三船君の方が強そうだなあ。こんなこと云うと、彼氏に怒られるかな。まあ、これも話のいきおいだからね、勘弁して頂くかな……

女性……？　どうもいけないね。酒というとすぐ女性の話を出されるからね。僕は、当分結婚しないよ。前にも云ったが、僕は、未だ二十七年と八ヶ月だものね、まだ早いよ。

それに、こんな商売しているとね、そんな暇がないよ。まして独立したばかりだし、身体がいくつあっても足りない位だらう。それに、結婚するとしても映画界の人ぢゃない方がいゝしね。いつになったら、他の世界の人でいゝ人にぶつかるか……。それにしても、もっともっと、僕が一人前になってからの話さ。和服も似合い、洋装も素適、僕は若いから、勝手な理想はやっぱり持っているし、といって、こればかりは理窟ぢゃどうにもならない。逢ったトタンにポーッとなったら、それでお終いじゃないかな。ポーッとなったら、そのひとが理想の女性なんだよ。だけど、僕には、そんなことよりまだまだやることが沢山あるんだものね。

そりゃあ、お袋は、早く結婚さして、孫の顔でも見たいだろうね。まあ、なるべく何年経ったらなんて計算しないで、この問題は自然に委せようと思っているな。ま、今は、好きな日本酒を、疲れ休めに飲む方が愉しいね。